



## ハスモンヨトウ

葛蒲 信一郎

## 文字通りの夜盗虫

ヨトウムシは漢字で「夜盗虫」と書きます。これは成虫・幼虫が夜に活発に活動することに由来しており、ハスモンヨトウについてもこの特徴はあてはまります。この虫は多食性で、約三〇科、約一〇〇種の植物を食害します。

ハスモンヨトウはアジア東部から東南アジア、オーストラリアにかけて分布する暖地系の害虫です。日本では昭和三十年代に入ってから、日本各地で多発生するようになり、年によっては多くの種類の農作物に大きな被害を与えています。

北部九州に位置する佐賀県では、大豆、野菜、花き類などで問題となりま



写真1 大豆の葉裏に産卵された卵塊

すが、今回は大豆におけるハスモンヨトウの性格と防除対策を考えてみます。

## ハスモンヨトウの性格

## 白変葉をつくる若齢幼虫

成虫（体長約4cmの蛾）は、大豆の葉裏に卵を数十～一〇〇〇個ほどをま



写真2 大豆圃場内の白変葉

とめて産卵します（卵塊 写真1参照）。卵塊は葉裏にあるため、圃場の外からは見つけるのが困難です。卵からふ化した若齢（一～二齢）幼虫はその周辺に群がり、表皮を残して葉を食害します（写真1）。このため、食害葉は白くすけてみえ、白変葉と呼ばれます。この白変葉は、圃場の外からでもたや



写真3 ハスモンヨトウ中～老齢幼虫



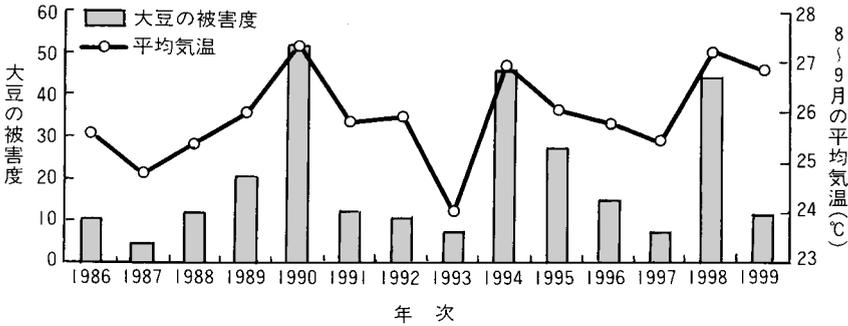
写真4 ハスモンヨトウの被害をうけた大豆圃場

すく見つけることができます（写真2）。

**葉を網目状に食い荒らす  
中～老齢幼虫**

中齢（三～四齢）以上になった幼虫はしだいに散らばり、硬い葉脈を残して葉を網の目状に食い荒らします（写真3、4）。幼虫の食害量の九〇％以上が、成長した老齢（五～六齢）幼虫によるものであるため、幼虫が大きくなるにつれ被害が増加します。ハスモンヨトウの幼虫は、齢が進み大きくなると薬剤の効果が低下します。また老齢幼虫は、主に昼間は株元に生

佐賀県におけるハスモンヨトウによる大豆の被害度（棒グラフ）と8～9月の平均気温（折れ線グラフ）との関係



息し、夜間食害するため、防除が困難となります。老齢幼虫は土中で蛹となり、その後羽化して成虫になります。

### 多発生しやすい条件

ハスモンヨトウの発生量は、年により大きく異なります。過去のデータを図に示していますが、夏から秋が平年より暑い年に（このような年は雨も少ない場合が多い）、ハスモンヨトウによる被害が大きくなっています。この主な原因として高温（少雨）年は、ハスモンヨトウの餌としての大豆の生育が良く、しかもこの虫の増殖率が高くなるためと考えられます。

### ハスモンヨトウの

### 防除のポイント

#### 防除適期は白変葉散見時

上記のハスモンヨトウの性格から、この虫が中～老齢幼虫の時（写真3、4）に防除を行なってもすでに手遅れで、防除効果は期待できません。若齢幼虫が増加している時、つまり圃場で

白変葉（写真2）が散見される時に防除を行なうのが最も効果的です（適期防除）。

白変葉が散見される圃場において、大豆の生育が良好な場合（播種後一カ月以上が経過）や、この時期に気象予報で高温少雨が予想されていたり、フェロモントラップの成虫捕獲数が増加している場合は特に注意を要します。

佐賀県の秋大豆（標準播種期は七月上旬）では、白変葉は通常八月中旬～下旬頃から圃場で散見されるようになり（生育ステージが進んだ早播き大豆ではもう少し早い）、一回目の防除適期となります。

#### 残害が厳しい年は

#### 追加防除も検討

ハスモンヨトウの発生は年次間差が大きく、一回目の適期防除を行なっても、その後の追加防除の必要回数は年によって異なります。上記の大豆圃場での白変葉、大豆の生育状況、気象予報、フェロモントラップでの成虫捕獲

数などから総合的に検討し、必要と判断された場合は、早急な追加防除が必要です。

佐賀県の大豆では九月に入っても、残暑が厳しい年は、再び白変葉が増加する場合があります。よって、九月もハスモンヨトウの発生には注意が必要であり、引き続き白変葉などの観察を行ないましょう。

なお莢伸長期以降は、カメムシ類との同時防除も考慮して、適切な殺虫剤を選択しましょう。ハスモンヨトウに効果が高かつ天敵類への影響も少ないIGR剤は、カメムシ類には効果がないことも認識しておく必要があります。

す。

## 何よりも白変葉発見が第一

ハスモンヨトウの防除適期である白変葉が散見される時は、まだ幼虫の発生が目立たず、被害もほとんどないため、油断して防除が手遅れになる場合が多くみられます。白変葉が散見される時を防除のポイントにおいたうえで、上記の気象予報などから総合的に検討し、必要と判断された場合は、早急に防除を行なうことが大切です。このことが結果的に、必要最小限かつ効果の高い防除の成功につながります。

(佐賀県農業試験研究センター)



長期残効型箱粒剤の使用は  
小力になるか？

六月となり、田植えも終わり、田んぼのイネは青々となっていて、近頃、アドマイヤー箱粒剤、プリンス粒剤などのいわゆる「長期残効型箱粒剤（以下、箱粒剤という）」を使っている方は多いと思います。セジロ